

■はじめに

校園長の皆さんこんにちは。教育委員会では教職員の多忙化の解消に取り組んでいます。校長会も効率よく進めるため、昨年度まで毎月行っていた講話を短縮し、あいさつ程度に留めていました。今月はお話の時間をいただきますが、その理念は変わらないことをご理解いただきたいと思います。



■産学官連携事業「Super Smart School」

**SUPER
SMART
SCHOOL** 生徒個人のスマホを授業に活用し、積極的なアクティブ・ラーニングを行う学校
スーパー・スマート・スクール

奈良市立一条高校はスマホの積極利用で学校を革新。

9月1日、新聞各紙に一条高等学校における産学官連携事業の記事が掲載されました。記事には「個人スマホ活用学習」という見出しが前面に出ていて、驚かれたかもしれません。現在一条高校では、スマートフォンを持ち込むことは問題ありませんが、校内で使用することは禁止されています。しかし、そこに敢えて踏み込み、今そこにあるものを

活用していきます。

この取組の背景には、国が進める大学入試制度改革があります。これからの国の教育制度を改革するには入試制度から変えていかなければなりません。現在、知識偏重の入試から、思考力や判断力、表現力を問う試験を行う検討が始められており、これらに向けて高校の授業も、従来の講義型から活発に意見を交わすような能動的な授業へ変わっていく必要があります。

一条高校は、奈良市唯一の市立高等学校で志望者の多い学校です。生徒たちは部活動に熱心で、規律を守り、勉学にも励んではいますが、入学してから急激に学習時間が減少し、再び大学入試に向けて勉強を始める姿があります。このような、大学合格を目標に据えた生徒の在り方で良いのでしょうか。彼らが卒業した10年後20年後、28歳や38歳になったとき、変わりゆく社会の中でどのような中心的役割を果たす人材になっているかを念頭に置いて、今の教育を考えなければなりません。これからの時代、正解のない先の見えない社会を生き抜くため、異なる文化、異なる考え方の相手とも話し合いができるコミュニケーション力、筋道を立てて説明ができるロジック力、自分の考えを皆の前できちりと伝えることができるプレゼンテーション力を小学校、中学校から育て、高校の段階では当然のごとく鍛えていかなければならないと考えています。

記事にはスマートフォンという部分が大きく取り上げられていますが、教員が行う授業

に取って代わるものではありません。教員が行う授業の柱はそのままに、講義型の授業を変えていきます。例えば、紙に書かせた意見を教員が回収し、次回授業時にまとめて返却していたものが、情報端末としてスマートフォンを活用すれば、教員はその場で全員の意見を把握でき、それぞれの生徒もリアルタイムに自分とは異なる考え方に触れることができるのです。生徒の気持ちが熱いうちに熱いやりとりをさせようというのがスマートフォン活用の一例です。また、各個人の待ち時間や移動時間といった隙間の時間を活用して学習できるビデオコンテンツも取り入れていきます。いつでもどこでも隙間の時間があれば、自分の苦手な部分のビデオ学習をしたり、理解できていなかった部分の振り返り学習ができます。ずっとスマートフォンでの授業をするわけでもありませんし、授業中にビデオを観るわけでもありません。生徒が自由な時間に学習の補填をしていくことが狙いです。私たちは、こういった学びを「Super Smart School（スーパー・スマート・スクール）」と呼んでいます。ITを駆使したスマートスクールを超えるという意味のスーパーを冠して、IT任せではなく、教員ならではの教育を推進します。

一方では、校内でスマートフォンの使用を解禁すると、公私の区別がつかないのではないかという懸念もあります。小学校に導入しているようなタブレットでしたら分かりやすいのですが、個人のスマートフォンでは一見して公私の見分けがつきません。この取組を進めていくためには、生徒自身がパブリックとプライベートの区別をつけなければなりません。来年夏頃には18歳以上の高校生にも選挙権を持たせるという時代になります。もはや、高校生も参政権を持った大人であるとして、公私のけじめをつける部分についても教育をしていく必要があります。

■新学習プログラム「バンビーキッズ」

もう1つの話題として、奈良市バンビーホーム5施設で塾が持つノウハウを活かし、バンビーホームに学習の要素を取り入れようという試みについての記事が新聞に掲載されました。奈良市は全国に先駆けて全ての小学校区にバンビーホームという放課後児童クラブを設けており、長い歴史と伝統があります。そこに求められているのは内容の充実であり、今の時代の保護者のニーズに応えていく必要があります。改めて全てのバンビーホームの様子を見に行きますと、働く保護者の中から習い事や様々な体験をさせてほしいという要望の声が集まりました。保護者が共働きでは送り迎えができないため、塾にも行かすことができず、学校の宿題もきちんとしているのか不安だということでした。昨年6月



に行ったアンケートでは、有料プログラムを取り入れてほしいというニーズが 63%ありま
したので、今回バンビーキッズという学習プログラムを導入しました。

このバンビーホームの取組も、先ほどの一条高校の取組も、狙いは同じです。これまで
私たちが育ってきた時代は、必ず正解があり、それを覚えて正確かつスピーディーに答え
ることを求められました。それが自分の幸せに繋がる時代でした。しかし、これからの時
代は子どもたちの目の前にどんな課題が現れるかもわからない、その課題さえ自分たちで
見つけなければならない社会になっていくと思います。そんな社会でもたくましく生きて
いく力、いわゆる思考力や判断力、表現力を育む、それが我々の仕事だと考えるのです。

■幼児教育に関する実験 ～マシュマロ・テスト 基本的モラルと社会的成功～

**マシュマロ
・テスト**



15分の間、食べるのを我慢したら、
マシュマロをもうひとつあげる。

セルフコントロール
「将来のより大きな成果のために、自己の衝動や感
情をコントロールし、目先の欲求を辛抱する能力」

さて、次に今回はスタンフォード大
学のウォルター・ミシェル教授の「マ
シュマロ・テスト」をご紹介しますと
思います。被験者は大学の附属の保育
園に通う 550 人以上の子どもたちで
す。被験者の子どもをマシュマロが 1
つ置かれた机の前に座らせ、「15 分間
食べるのを我慢できたらもう 1つマシ
ュマロをあげよう」と言い残し、子ど
もを 1人で部屋に残します。約束を守

った子どもは約 1/3。その子どもたちを 10 年ごとに追跡調査を行ったところ、我慢した子
どもは我慢できなかった子どもに比べ、対人関係の能力やストレス耐性に優れ、学業も優
秀ということでした。この傾向は生涯ずっと継続していることが確認されており、就学前
の子どもたちにセルフコントロールと規範意識を身に付けさせることが大切であることが
分かります。

また、京都大学の西村和雄教授の「基本的モラルと社会的成功」という論文が、国の教
育再生実行会議の第 8 回提言に資料として掲載されています。これは、子どもの頃のしつ
つけが将来のその子の社会的活躍に影響するという内容です。モニターの中から無作為に抽
出した 9 万人に対してインターネット調査を行っています。調査対象者について所得や学
歴とともに、次の 8 つのしつけについてどれを受けた記憶があるかを質問しています。そ
の 8 つのしつけとは、「ルールを守る」「あいさつをする」「他人に親切にする」「勉強をす
る」「親の言うことを聞く」「うそをついてはいけない」「ありがとうと言う」「大きな声
を出す」です。西村教授は、この中から「うそをつかない」「他人に親切にする」「ルール
を守る」「勉強をする」の 4 つの基本的モラルのしつけを受けてきた人が、所得も学歴も高い
と結論付けました。さらに、この 4 つを全て覚えている人と 1 つでも忘れてしまった人で

は、年収にして64万円もの差ができていくというのです。つまり、4つの基本的モラルを全て教える必要があります。この4つの基本ができていれば、それ以外は後から継ぎ足すことができます。「しつけは考えるのではなくて繰り返し覚えさせるものだ」という西村教授の言葉の通り、幼児の頃から記憶に残るまでずっと繰り返し言い続け、4つのしつけの種を蒔いておくことが重要です。

“うそをつかない”
“他人に親切にする”
“ルールを守る”
“勉強をする”

■おわりに

今回はそれぞれの発達段階についての話題を紹介しました。発達段階において押さえておくべき点は違うでしょうが、先の見えない社会をたくましく生き抜いていく子どもを育てるためには、次の発達段階を見据えて考えなければならないのです。今、目の前の子どもたちへの対応だけでは足りないのではないかと思います。私たちが先を見据えた改革を躊躇すれば、将来困るのは子どもたちなのです。

最後に、西村教授のいう4つのしつけは理屈で教えるものではなくて、繰り返し覚えさせるということでした。校園長の皆さんはどのように判断されるでしょうか。「うそをつかない」「他人に親切にする」「ルールを守る」「勉強をする」この4つを学級に貼り出したり、学校園での話題の1つにしてもらうなどして活かしてみればどうかという提案をもって、結びとさせていただきます。